

(四六判 四五六頁 一九七八年十一月
紀伊國屋書店 四〇〇〇円)
(永田諒一 岡山大学講師)

Derek Gregory,

Ideology, Science and

Human Geography

デレク・グレゴリーは、ケンブリッジ大学の地理学講師であるとともに、シドニー・サセックス・コレッジのフェローである。本書における著者の意図は、従来多くの研究が依拠してきた実証主義 (Positivism) 的立場から批判的立場への転回にある。このような試みは、すでに若干の地理学者によって着手されているが、ここでは地理学を社会科学一般と結びつけ、そこでの論議を通じて地理学の本質の再検討をめざしたものである。

序説「自然諸科学における地位」では、地理学における自然主義偏重の伝統を指摘し、人間とその周囲の世界の関係に対する批判的理解になんら展望を与えない抽象的な諸命題に、多彩な人間経験を解消するこ

との危険を述べる。

第一部「地理学における実証主義・批判的諸要素」においては、まず基礎作業としてコントの所説に着目し、ついで地理学での実証主義、なかならず論理実証主義の系譜を述べるとともに、その批判を哲学の成果を援用して詳細に展開する。ここでは、歴史的な特殊性を普遍的概念へ還元することに對して、強い不信任感が表明されている。そして、批判的社会科学は、「構造的説明」「反省的説明」「実践的説明」の三つの説明様式を含まねばならない、とする。これらの説明様式の具体的な吟味が、第二部「地理学と批判的科学・代替的定式化」で行なわれる。

まず、直接的な経験の基底に潜む不変のものに基づく「構造的説明」の章では、レヴィ・ストロースの所論や、アルチュセールのマルクス主義的構造主義に言及する。そして、それらを空間的脈絡へ移し変えるさいの問題点を指摘する一方で、若干の研

究例も紹介している。また、「反省的説明」の章においては、フッサールの学説を、地理学におけるライフワールド論との関連で述べる。そして、

主観的な志向性を客観的研究に結びつけるさいの問題点を論ずるとともに、地理学での「解釈」のもつ意味を掘り下げる。

さらに、「実践的説明」の章では、ホルクハイマーからハーバーマスへと続くフランクフルト学派に拠りつつ、現在の地理学の枠組を批判する。そして、理論と現実は、実践という課題を通じて結ばれ、両者はそれによって相互に豊かにされねばならない、と主張する。

以上が、内容の簡単な紹介である。本書の大きな意義は、「計量革命」後の地理学を支えた実証主義に対する明確な反論を通じて、地理学のオリエンテーションの多元化をめざすとともに、現在の社会科学一般にみられる批判的見解を導入することによって、七〇年代の新たな動向に哲学的な基礎を与えようとした点に、見い出せる。

(198 pp. 1978, Hutchinson, London)
(石川義孝 京都大学助手)